opusdei.org

『神は愛』教皇ベネ ディクト16世による 最初の回勅

キリスト教的愛について解説 した教皇ベネディクト16世に よる最初の回勅「Deus caritas est(神は愛)」を紹介 します。主の御降誕の祝日に 当たる2005年12月25日付で 出されました。

2006/05/31

回勅の概略

この回勅は二部で構成されています。第一部は、「創造と救いの歴史における愛の一致」と題され、「コース」「フィリア」「アガペー」など様々な観点から「愛」を論じ、哲学的・神学的考察を加え、神のと類に対する愛の本質は人間的などを明らかにしてゆきます。第二部は、

「愛徳、それは共同体である教会の 愛の実践」と題され、隣人愛の掟の 具体的な実践を取り扱っています。

第一部

今日、世界中で『愛』という言葉は たくさんの人が口にして、よく乱用 され、幅広い意味で使われていま す。このように多様な意味で用 ますが、そもそもは男女の素晴ら しい愛を原型として生まれた言葉で す。古代ギリシャでは、それをで す。古代ギリシャでは、そのように定 されました。聖書、特に新約聖書で は「愛」の概念が豊かになり、「エロース」は隅に追いやられ、自己を捧げる愛を示す「アガペー」に取って代わられました。

この愛の新しい考え方は、キリスト 教的な生き方の新しさの中心になり ました。しかし、「エロース」とい う身体的愛を拒絶するものと誤解さ れ、度々、頭から否定されてきまし た。確かにそのような側面があるに しても、新しくなったのはその点で はありません。つまり、「エロー ス | は創造主ご自身によって人間の 本性に備えられたものですが、本来 の尊厳を失わないように、また人間 の品位を落として「性」を商品化し ないように、その愛を清め、成熟さ せる秩序を必要としているというこ とです。

人間は体と霊が互いに合わさり一つ になり新たに高貴な命に向かう、と キリスト教の信仰は常に教えてきま

した。したがって「エロース」の愛 が目指していたものは、人間が体と 霊の完璧な調和を見出すときに解決 するのです。確かに、愛は「エクス タシー(忘我) | ですが、いわゆる その場限りの虚しい「歓び」ではな く、自分の殻に閉じこもっている自 我から解き放たれ、自己を与え尽く すことです。こうして人間は本当の 自分と出会い、さらには神を発見す るのです。このように、「エロー ストは人間を神の事柄へ向かわせる 「エクスタシー(忘我)」にまで高め られるのです。

つまり、「エロース」と「アガペー」は決して別々のものではないということです。その逆に、様々なということですのがランスをよってのがランスをよります。「エローのでは、最初に愛するあの人に近づくにしたできるのとを考えなくなり、愛す

る人の幸せを考えるようになります。そして、その人のための「わたし」になることを望み、自己を捧げます。こうして、相手の中に入り込み、そのときから「アガペー」になるのです。

イエス・キリストにおいては、神の 愛が受肉していて、「エロース」と 「アガペー」の愛がもっとも深い形 で一つになっています。また十字架 上で亡くなる時、イエスは人類を救 い高めるために御自分を捧げものに し、最も素晴らしい形でその愛を表 してくださいました。さらに、この 捧げものがいつまでも続くように御 聖体を制定なさいました。パンとぶ どう酒の外観の下に旧約時代のマン ナのようにイエスご自身が身を捧げ て私たちのうちにとどまり、主と一 つにさせてくださいます。そして、 御聖体に与る私たちも自己を捧げる ように促されます。主と一つにな り、また主に与るすべての人々とも

一つになります。つまり、私たちは 「一つの体」になるのです。こうし て、神への愛と隣人への愛が真に融 合するのです。この二つの掟は、あ りがたいことに神の「アガペー」に 出合うことで、単なる義務ではなし なりました。愛によってすでに自身に を捧げているので、愛が自分自身に 「命じる」のです。

第二部

隣人愛は神への愛に基づいており、 信者一人だけでなく、教会全体 にとっても一つの義務になっまはこれ す。だから、教会の慈善事業なは三 一体の神の愛を映し出してい意識が出 であるにしての義務の意識が初 代教会の時から教会にしれ が教会のし、早い時期からこの義務を より効果的に実践するために特定 より効果的に実践するために は は は が必要であることを明らかに ました。

そして、隣人への愛に奉仕する 「ディアコニア」が、教会の基本的 な制度として生まれてきました。霊 的であると同時に具体的な活動の奉 仕の形を整え、人々に実際に奉仕し ました。この慈善事業は、教会の発 展に伴い教会の中心的な特徴の一つ になりました。教会を特徴付けるも のとして、三つの働きがあります。 神のみことばを告げること(ケリグ マ)、秘跡を執り行うこと(リトゥ ルジア)、そして、愛徳の奉仕 (ディアコニア)です。これは互い に関連しあって、個々別々にできな いものです。

19世紀以降、教会の慈善事業が批判にさらされてきました。愛徳の行為がかえって不正な社会を温存することになっている、というのが反対者の意見でした。個人的な愛徳の業が実践されることで、社会を改善するための抵抗や反乱にブレーキがかかり、教会は結果的に社会の不正をそ

のままにすることに手を貸していると言うのです。

この点で、マルクス主義は社会的な 問題解決の万能薬として世界的な革 命を主張しましたが、この夢は、近 年において虚しい結果に終わりまし た。レオ十三世の「レールム・ノ バールム | (1891年)から、ヨハネ・ パウロ二世の三部作「働くことにつ いて | (1981年)、「真の開発とは | (1987年)、「新しい課題」(1991年) まで、回勅を通して教導職は年を 追って増大する新しい社会問題につ いて取り組んできました。そして、 社会教説を発展させ、教会の領域を 越えて有効な指針を提案してきまし た。

しかし、国や社会に正義と秩序を構築していくことは、第一に政治が取り組むべき仕事であり、教会の第一の使命ではありません。カトリックの社会教説は、国家権力を教会に付

世界のグローバル化による肯定的な現代社会の両陣営において見いるようなおます。国家という枠を超えてのといるようなではないの配慮が示されて知識があると違った形で連帯を発して、数々の団体が形成されませ、をありたが教会の団体が形成されません。団体の中にも新しい愛徳の事業が生み

出されました。これらの組織が互いに緊密に協調して実りをもたらすことが望まれています。もちろん、教会の慈善事業が他の福祉団体に吸収され本来の性格を失うようなことは極いまうに配慮することは極い大変です。教会の有するキリスト教しなです。教会の有するキリスト教しなければなりません。

したがって、キリスト教的な慈善事業は専門的であると同時に、個人的には常にキリストと出会う経験であるべきです。その人の隣人愛を通してキリストの愛が相手の心に触れるということです。

また、キリスト教的な慈善事業はイデオロギーから独立していなければなりません。キリスト者の生き方は「善いサマリア人のような生き方、つまりキリストの生き方」であり、「心が見える」ように振舞うことです。心が見えるとは、愛が必要な所

で、それに応じて行動することです。

さらに、キリスト教的な慈善事業が 宣教の道具となってはなりません。 愛はいつも無償です。他の目的んの とはいってはありませがではありませがでではありませが、 と関係ないと者はいるよりません。 と関係ないと者はいいのません。 はありません。 はありません。 はいの はいるかを知っないいのまた はいるがを知らないないないが 正義に強るる活動主義に陥らないないないない。 と関係ないとはないないないないないが はないないのまた。 はないとの が教会のすべての を別です。

この点については、福祉活動に取り 組んでいるキリスト者が陥りやすい 世俗主義の危険に直面しています。 今こそ、祈りの重要性を省みなけれ ばなりません。キリストと生き生き と接するならば、膨大な必要性や自 己の限界を経験し、神が願いを実現

Vatican Information Service

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shen-haai-jiao-huang-benedeikuto16shiniyoruzui-chu-nohui-chi/(2025/11/07)